新潮文庫

金色夜叉

上卷

尾崎紅葉著

新潮社

金色夜叉　上巻

定價90圓

新潮文庫

昭和二十七年一月二十一日　印刷
昭和二十七年一月二十五日　發行

著者　尾崎紅葉

東京都新宿區矢來町七一
發行者　佐藤義夫

東京都新宿區矢來町七一
發行所　株式會社　新潮社
電話九段(33)〇一一一番
〇一一二番
〇一一三番
〇一一四番
〇一一五番
振替東京八〇八番

亂丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

東京都中央區銀座西6～2・株式會社　細川活版所印刷

新潮文庫

金色夜叉

上卷

尾崎紅葉著

目次

前編……七
中編……九
後編……一九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

金色夜叉

上卷

前編

第一章

未だ宵ながら松立てる門は一様に鎖籠めて、眞直に長く東より西に横はれる大道は掃きけるやうに物の影を留めず、いと寂しくも往來の絶えたるに、例ならず繁き車輪の輾は、或は忙しかりし、或は飲過ぎし年賀の歸來なるべく、疎に寄する獅子太鼓の遠響は、はや今日に盡きぬる三箇日を惜むが如く、其の哀切に小き腸は斷れぬべし。

元日快晴、二日快晴、三日快晴と誌されたる日記を瀆して、此黄昏より凩は戰出でぬ。今は（風吹くな、なあ吹くな）と優しき聲の宥むる者無きより、憤をも增したるやうに飾竹を吹靡けつゝ、乾びたる葉を粗なげに鳴して、吼えては走行き、狂ひては引返し、揉みに揉んで獨り散々に騷げり。微曇りし空は之が爲に眠を覺されたる氣色にて、銀梨子地の如く無數の星を顯して、鋭く冴えたる光は寒氣を發つかと想はしむるまでに、其の薄明に曝さるゝ夜の街は殆ど氷らんとするなり。

人此裏に立ちて寥々冥々たる四望の間に、爭か那の世間あり、社會あり、都あり、町あることを想得べき。九重の天、八際の地、始めて渾沌の境を出でたりと雖も、萬物未だ盡く化生せず、

風は試に吹き、星は新に輝ける一大荒原の、何等の旨意も、秩序も、趣味も無くて、唯濫に邈く横はれるに過ぎざる哉。日の中は宛然沸くが如く樂み、謳ひ、醉ひ、戯れ、歡び、笑ひ、語り、興ぜし人々よ、彼等は儚くも夏果てし孑子の形を斂めて、今將何處に如何にして在るかを疑はざらんとするも難からずや。多時靜なりし後、遙に拍子木の音は聞えぬ。其響の消ゆる頃忽ち一點の燈火は見え初めしが、揺々と町の盡頭を横截りて失せぬ。再び寒き風は寂しき星月夜を撼に吹くのみなりけり。唯有る小路の湯屋は仕舞を急ぎて、廂間の下水口より噴出づる湯氣は一團の白き雲を舞立てゝ、心地悪き微溫の四方に溢るゝと與に、垢臭き悪氣の盛に逆るに遭へる綱引の車あり。勢ひで角より曲り來にければ、避くべき遑無くて其中を駈拔けたり。

「うむ、臭い。」

車の上に聲して行過ぎし跡には、葉卷の吸殼の捨てたるが赤く見えて煙れり。

「もう湯は拔けるのかな。」

「へい、松の内は早仕舞でございます。」

車夫の恁く答へし後は語絶えて、車は驀直に走れり、紳士は二重外套の袖を犇と搔合せて、獺の衿皮の内に耳より深く面を埋めたり。灰色の毛皮の敷物の端を車の後に垂れて、横縞の華麗なる浮波織の蔽膝して、提灯の徽章はTの花文字を二個組合せたるなり。行き〳〵て車は此小路の盡頭を北に折れ、稍廣き街に出でしを、僅に走りて又西に入り、其の南側の中程に箕輪と記したる軒燈を掲げて、剡竹を飾れる門構の内に挽入れたり。玄關の障子に燈影の映しながら、格子の

鎖固めたるを、車夫は打叩きて、

「頼む、頼む。」

奥の方なる響動の劇しきに紛れて、取合はんともせざりければ、二人の車夫は聲を合せて訪ひつゝ、格子戸を連打にすれば、旋て急足の音立てゝ人は出で來ぬ。

圓髷に結ひたる四十約の小く痩せて色白き女の、茶微塵の絲織の小袖に黒の奉書紬の紋付の羽織着たるは、此家の内儀なるべし。彼の忙しげに格子を啓るを待ちて、紳士は優然と内に入らんとせしが、土間の一面に充滿たる履物の杖を立つべき地さへあらざるに遲へるを、彼は虚さず勤篤に下立ちて、此の敬ふべき賓の爲に辛くも一條の道を開けり。恁て紳士の脱捨てし駒下駄のみは獨り障子の内に取入れられたり。

（一）の　二

箕輪の奥は十疊の客間と八疊の中の間とを打拔きて、廣間の十個處に眞鍮の燭臺を据ゑ、五十目掛の蠟燭は沖の漁火の如く燃えたるに、間毎の天井に白銅鍍の空氣ランプを點したれば、四邊は眞晝より明に、人顔も眩きまでに耀き遍れり。三十人に餘んぬる若き男女は二分に輪作りて、今を盛りと歌留多遊を爲るなりけり。蠟燭の焔と炭火の熱と多人數の熱蒸と混じたる一種の溫氣は殆ど凝りて動かざる一間の内を、莨の煙と燈火の油煙とは更に縺れて渦卷きつゝ立迷へり。込

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

合へる人々の面は皆赤うなりて、白粉の薄剝げたるあり、髪の解れたるあり、衣の亂次く着頽れたるあり。女は粧ひ飾りたれば、取亂したるが特に著るく見ゆるなり。男はシャツの腋の裂けたるも知らで胴衣ばかりになれるあり、羽織を脱ぎて帶の解けたる尻を突出すもあり、十の指をば四まで紙にて結ひたるもあり。然しも息苦しき溫氣も、咽ばさるゝ煙の渦も、皆狂して知らざる如く、寧ろ喜びて罵り喚く聲、笑頽るゝ聲、捩合ひ、踏破く犇き、一齊に揚ぐる響動など、絶間無き騷動の中に狼藉として戯れ遊ぶ爲體は、三綱五常も糸瓜の皮と地に塗れて、唯是修羅道を打覆したるばかりなり。海上風波の難に遭へる時、若干の油を取りて航路に澆げば、浪は奇くも忽ち鎭りて、船は九死を出づべしとよ。今此の如何とも爲べからざる亂脈の座中をば、其油の勢力をもて支配せる女王あり。猛びに猛ぶ男たちの心も其人の前には和ぎて、終に崇拜せざるはあらず。女たちは皆猜みつゝも畏を懷けり。中の間なる團欒の柱側に席を占めて、重げに戴ける夜會結に淡紫のリボン飾して、小豆鼠の縮緬の羽織を着たるが、人の打騷ぐを興あるやうに涼き目を瞪りて、躬は淑かに引繕へる娘あり。粧飾より相貌まで水際立ちて、凡ならず媚を含めるは、色を賣るものゝ假の姿したるにはあらずやと、始めて彼を見るものは皆疑へり。一番の勝負の果てぬ間に、宮といふ名は普く知られぬ。娘も數多居たり。醜きは、子守の借着したるか、茶番の姫君の戸惑せるかと覺しきもあれど、中には二十人並、五十人並優れたるもありき。服裝は宮より數等立派なるは數多あり。彼は其點にては中の位に過ぎず。貴族院議員の愛娘とて、最も不器量を極めて遺憾なしと見えたるが、最も綺羅を飾りて、其起肩に紋御召の三枚襲を被ぎて、帶は

紫根の七絲に百合の折枝を縒金の盛上にしたる、人々之が爲に目も眩れ、心も消えて眉を皺めぬ。此外種々色々の絢爛なる中に立交らひては、宮の裝は纔に曉の星の光を保つに過ぎざれども、彼の色の白さは如何なる美しき染色をも奪ひて、彼の整へる面は如何なる麗はしき織物よりも文章ありて、醜き人たちは如何に着飾らんとも其の醜きを蔽ふ能はざるが如く、彼は如何に飾らざるも其の美しきを害せざるなり。

袋棚と障子との片隅に手爐を圍みて、蜜柑を剝きつゝ語ふ男の一個は、彼の横顔を恍惚と遙に見入りたりしが、遂に思堪へざらんやうに呻き出せり。

「好い、好い、全く好い！　馬士にも衣裳と謂ふけれど、美しいのは衣裳には及ばんね。物其自らが美しいのだもの、着物などは如何でも可い、實は何も着て居らんでも可い。」

「裸體なら猶結構だ！」

此の强き合槌擊つは、美術學校の學生なり。

綱曳にて駈着けし紳士は姑く休息の後内儀に導かれて入來りつ。其後には、今まで居間に潛みたりし主の箕輪亮輔も附添ひたり。席上は入亂れて、爰を先途と激しき勝負の最中なれば、彼等の來れるに心着きしは稀なりけれど、片隅に物語れる二人は逸早く目を側めて紳士の風采を視たり。

廣間の燈影は入口に立てる三人の姿を鮮かに照せり。色白の小き内儀の口は疳の爲に引歪みて、其夫の額際より赭禿げたる頭顱は滑かに光れり。妻は尋常より小きに、夫は勝れたる大兵肥滿に

て、彼の常に心遣ありげの面色なるに引替へて、生きながら布袋を見る如き福相したり。

紳士は年齢二十六七なるべく、長高く、好き程に肥えて、色は玉のやうなるに頬の邊には薄紅を帶びて、額厚く、口大きく、腮は左右に蔓りて、面積の廣き顏は稍正方形を成せり。緩く波打てる髪を左の小鬢より一文字に撫付けて、少しは油を塗りたり。濃からぬ口髭を生して、小からぬ鼻に金緣の目鏡を挾み、五紋の黑鹽瀨の羽織に華紋織の小袖を裾長に着做したるが、六寸の七絲帶に金鏈子を垂れつゝ、大樣に面を擧げて座中を眴したる容は、實に光を發つらんやうに四邊を拂ひて見えぬ。此團欒の中に彼の如く色白く、身奇麗に、而も美々しく裝ひたるはあらざるなり。

「何だ、彼は？」

例の二人の一個は然も憎さげに呟けり。

「可厭な奴！」

唾吐くやうに言ひて學生は故と面を背けつ。

「お俊や、一寸。」と內儀は群衆の中より其娘を手招きぬ。

お俊は兩親の紳士を伴へるを見るより、慌忙しく起ちて來れるが、顏好くはあらねど愛嬌深く、いと善く父に肖たり。高島田に結ひて、肉色縮緬の羽織に撮みたるほどの肩揚したり。顏を赧めつゝ紳士の前に跪きて、慇懃に頭を低れば、彼は纔に小腰を屈めしのみ。

「どうぞ此方へ。」

娘は案内せんと待構へけれど、紳士は然して好ましからぬやうに頷けり。

母は歪める口を怪しげに動かして、

「あの、見事な、まあ、御年玉を御戴きだよ。」

お俊は再び頭を低げぬ。紳士は笑を含みて目禮せり。

「さあ、まあ、被入いまし。」

主の勸むる傍より、妻はお俊を促して、お俊は紳士を案内して、客間の床柱の前なる火鉢在る方に伴れぬ。妻は其處まで介添に附きたり。二人は家内の紳士を遇ふことの極めて鄭重なるを訝りて、彼の行くより坐るまで一擧一動も見脱さゞりけり。其の行く時彼の姿は恰も左の半面を見せて、團欒の間を過ぎたりしが、無名指に輝ける物の凡ならず强き光は燈火に照添ひて、殆ど正しく見る能はざるまでに眼を射られたるに呆れ惑へり。天上の最も明なる星は我手に在りと言はまほしげに、紳士は彼等の未だ曾て見ざりし大さの金剛石を飾れる黄金の指環を穿めたるなり。お俊は骨牌の席に復へると倖しく、密に隣の娘の膝を衝きて口早に呼きぬ。彼は忙々しく、顔を擡げて紳士の方を見たりしが、其人よりは其指に耀く物の異常なるに駭かされたる體にて

「まあ、那の指環は！　一寸、金剛石？」

「然うよ。」

「大きいのねえ。」

「三百圓だつて。」

お俊の説明を聞きて彼は漫に身毛の彌立つを覺えつゝ、

「まあ！　好いのねえ。」

鰐の目ほどの眞珠を附けたる指環をだに、此幾歳か念懸くれども未だ容易に許されざる娘の胸は、忽ち或事を思ひ浮べて攻鼓の如く轟けり。彼は惘然として殆ど我を失へる間に、電光の如く隣より伸來れる猿臂は鼻の前なる一枚の骨牌を引攫へば、

「あら、貴方如何したのよ。」

お俊は苛立ちて彼の横膝を續けさまに拊きぬ。

「可くってよ、可くってよ、以來もう可くってよ。」

彼は始めて空想の夢を覺して、及ばざる身の分を諦めたりけれども、一旦金剛石の强き光に燒かれたる心は幾分の知覺を失ひけんやうにて、然しも目覺しかりける手腕の程も見る〳〵漸く四途亂になりて、彼は敢無くも此時よりお俊の爲に賴み難き味方となれり。

恁して彼より此に傳へ、甲より乙に通じて、

「金剛石！」

「うむ、金剛石だ。」

「金剛石??」

「成程金剛石！」

「まあ、金剛石よ。」

「那が金剛石？」

「見給へ、金剛石。」

「あら、まあ金剛石??」

「可感い金剛石。」

「可恐い光るのね、金剛石。」

「三百圓の金剛石。」

瞬く間に三十餘人は相呼び相應じて紳士の富を謳へり。

彼は人々の交互におのれの方を眺むるを見て、其手に形好く葉巻を持たせて、右手を袖口に差入れ、少し懈げに床柱に靠れて、目鏡の下より下界を見遍すらんやうに目配して居たり。

恁る目印ある人の名は誰しも問はであるべきにあらず、洩れしはお俊の口よりなるべし。彼は富山唯繼とて、一代分限ながら下谷區に聞ゆる資産家の家督なり。同じ區なる富山銀行は其父の私設する所にして、市會議員の中にも富山重平の名は見出さるべし。

宮の名の男の方に持囃さるゝ如く、富山と知れたる彼の名は直に女の口々に誦ぜられぬ。あはれ一度は此紳士と組みて、世に愛たき寶石に咫尺するの榮を得ばや、と彼等の心々に冀はざるは希なりき。人若し彼に咫尺するの榮を得ば、啻に其の目の類無く樂さるゝのみならで、其の鼻までも菫花の多く麝ぐべからざる異香に薫ぜらるゝの幸を受くべきなり。男たちは自から荒められて、女の擧りて金剛石に心牽さるゝ氣色なるを、或は妬く、或は淺ましく、多少の興を冷さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com